
ロスト・チルドレン

南 晶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ロスト・チルドレン

【Nコード】

N1427Y

【作者名】

南 晶

【あらすじ】

不倫中のOL美由紀は、偶然、初めて付き合った彼氏の準一に再会する。

6年振りに会った彼は、義父から受けた虐待の為に声が出なくなっていた。

夢も希望もないOLの美由紀と、トラウマを抱えた工場派遣社員の準一。

社会の底辺で彷徨っていた二人は再び歩き出そうとするのだが・・・？

再会 1

クリスマスも近い11月の半ば。
事務所の壁時計の針が5時半を指したその瞬間、あたしはデスクから勢い良く立ち上がった。

「お先に失礼しますっ！」

これから残業モードに入ろうと、のんびり席を立ってコーヒーを入れ始めた同僚達を尻目に、あたしはそう言い放ってデスクの中からバッグを掴んで引っ張り出す。

零細企業の給料計算が仕事というしがないOLのあたしが、たった一時間残業したところで会社の利益に繋がることはない。
寧ろ、無駄な経費だ。

明日できることは今日しないのが、あたしのライフスタイルだった。
しかも、今日は待ちに待った金曜の夜。
あたしには大切な約束がある。

「美由紀^{みゆき}、やけに急いでんじゃん？何かいいことあるわけ？」

隣のデスクでパソコンと睨めっこしていた同僚、田中裕美^{たなかゆみ}がチラリと目だけ動かしてあたしを見た。
彼女の鋭い視線に、あたしはドキっとするも平静を装って笑顔を作った。

「何にもありませんよーだ。期待してもムダだよ。男でもできたらユミにも紹介するって。」

「じゃ、何で週末の仕事上がりに急いでんの？」

ニヤリと笑いながら意地悪く突っ込んでくるユミを、あたしは軽くあしらう。

「できる女は残業しないんだよ。あたしは会社が嫌いなの。じゃ、また月曜日にね。」

まだ訝しげにあたしの背中を見つめるユミの視線を無視して、あたしはオフィスを飛び出した。

この会社に入社して早5年。

地元の商業高校卒業と同時に入社した地元零細企業は、毎月同じことの繰り返しで、もう既に飽き飽きしている。

給料計算という仕事は、時々社員の入れ替わりがある他は決まった事を締め日までに行えばそれで事足りた。

会社が高卒の若い女の子に大した責任を負わせる筈もなかったが、あたしも仕事に情熱など感じた事などない。

ただ生活の為に割り切って、業務を淡々とこなす毎日だ。

23才にして人生に夢も希望もないあたしが、死ぬほど心待ちにしていることが一つだけあった。

それが毎週一回だけ訪れる金曜の夜。

まさに今夜だ。

チョコレートブラウンの小さな軽自動車に乗り込み、あたしは会社の駐車場を飛び出した。

まだ6時前だというのに日は完全に落ちて、街灯があちこちにつき

始める。

晩秋の風が肌身に染みて、人肌恋しい季節の到来を感じる。
薄暗い夕闇の中、あたしは今夜の逢瀬に思いを馳せる。

そうだ、お酒とつまみでも買っていこう。

アイスクリームと甘いチョコレートも。

お腹が減った時のために冷凍のピザでも用意しよっかな。

明日の朝食べるクロワッサンとコーヒーも・・・。

遠足の用意をする子供みたいに、あたしの胸は楽しみで高鳴っている。

今夜の事は楽しみだけど、こんな風に考えながら買い物したりするのも、あたしは好きだった。

遠足当日より前日までの方が楽しいのと同じ心境だ。

大好きな人の為に何かを用意するって、こんなに幸せなことなんだ。あたしは道路沿いにスーパーを発見すると、車をそこに滑り込ませた。

仕事帰りの主婦達で混み合うスーパーの駐車場をしばらくウロウロした後、やっと見つけた軽専用の一角に車をバックで入れた。

何とか入ったものの、真っ直ぐになっていないので運転席のドアが隣に車に接触しそうで開かない。

運転が下手な私には日常茶飯事のことなので、助手席側から降りようとお尻をずらした。

その時。

とんでもない光景があたしの目の前に繰り広げられた。

車の前をゆっくりと通り過ぎていく子供連れの夫婦。

赤ちゃんを抱いた上品な若奥様が5歳くらいの男の子の手を引いて

いる。

それに寄り添うように歩いていく買い物袋を一杯抱えたハンサムな男性。

甘いマスクが美しい妻を見つめて、柔らかな微笑みを浮かべている。よくある微笑ましい風景だ。

ある一点を除いては。

私は車の中で硬直したまま、目の前を通り過ぎていく夫婦をバカみたいに見送った。

そのハンサムな旦那こそ、あたしが今夜遭うことになっていた筈の男性だったのだ。

再会 2

件名 予定変更

本文 ゴメン、今日会えない。嫁が突然子供と一緒に帰ってきた。また連絡する。

彼からこんなメールが来たのは、約束の時間もとくに過ぎた夜9時頃だった。

行く当てがなくなったあたしは、駅前のコイン駐車場に車を止めたまま、ボンヤリと彼からの連絡が来るのを待っていたのだ。

今頃返信してくるとは、あたしと会うことなんて完全に忘れていたらしい。

直接マンションに行つて、嫁と鉢合わせしたらどーするつもりだったんだか。

幸か不幸か、あたしはその前に地雷を踏んで勝手に自爆した。神様の計らいと感謝すべきなんだろうか。

文句を言える立場でないのは分かつてる。

おバカなあたしでも、身の程はわかまえてるつもりだ。

世に言う不倫の関係で、妻の妊娠中の里帰りに隙について幸せな家庭にヒビを入れてるのはあたしなんだ。

彼の家庭を壊すつもりもないし、奥さんに何の恨みがあるわけでもない。

むしろ謝りたいくらいだ。

でも、だからと言ってこの関係を止める勇気はあたしにはなかった。

一つは彼が好き。

イケメンで優しく、セックスの相性もバツグンで、何と云ってもお金を持っている。

彼は大手商社の営業マンで、今まで付き合った男でこんなに金払いがいいのは初めてだった。

この不景気の時代、本物の恋人に割り勘させる男が主流だったのに、さすが年上の貫禄だ。

彼の車でお姫様みたいに連れ回されて、ラブホじゃないホテルにエスコートして貰うのは私の至福の時だった。

もう一つは、彼の他にあたしには頼るものがないこと。

夢も希望も将来もない、しがないOLが唯一心の支えにしているのは彼と会える金曜の夜だけだった。

それを奪われたら、あたしに何が残るだろう。
もはや生きてる意味さえ無くなるような気がした。

・・・いいじゃん。

奥さんは彼と子供と安定した将来が約束されてんだから。
週一回くらい貸してくれてもいいじゃん。

ちゃんと返すから、夢くらい見せてくれてもいいじゃない・・・。

気が付いたらポロポロと涙が零れ落ちていた。

泣いたのなんて久し振りだ。
クールで現実主義のあたしにも、こんな感情が残ってたのは自分でも驚きだった。

あたしはティッシュを掴み取り、ズズッと鼻をかんでから、ハンド
ルに引っ掛けてあるゴミ袋に押し込む。

ああもう！

どうつけてくれるのよ、この落とし前！

ブツクサ毒を吐きながら勢い良くドアを開けると、あたしは夜の街に向かつて歩き始めた。

晩秋と言うより、もはや冬に近い寒さだった。

しけた田舎の駅前には軒並み店仕舞いしていて、木枯らしでシャツがガタガタ音を立てているのが尚、物悲しい。

この自称繁華街で唯一賑わっている場所が、ロータリーの反対側に位置するマクドナルドだ。

家に帰っても、外泊の予定だったあたしに晩御飯は用意されていない。

無意識に足が向かったのは、人恋しさか、空腹ゆえか……。とにかく、あたしは明かりを目指す蛾の如く、ノロノロとマクドナルドに向かつて歩いていった。

「フィレオフィッシュセット、ドリンクはホットコーヒーで。」

横柄な態度で注文したあたしに、カウンターの店員は笑顔すら見せて素早くトレイを用意し始めた。

さすがスマイル0円だ。

高校生だろうか。

ショートカットの爽やかな女の子だった。

すっぴんの肌がピンク色でツヤツヤしている。

たった5年前まではあたしだって高校生だったのに、どうして今、こんなにどん底なんだろう。

どこで間違って、こんな女の子になっちゃったんだろう。

溜息をついた時、後ろに人がいるのに気が付いて、あたしは慌てて場所を譲った。

レジの横で待つのはマクドナルドの常識だ。

後ろの人は待っていたかのように、スっと前に出る。

大柄な男性だ。

モスグリーンの上下揃いの汚れた作業着から、鼻にツンとくる車のオイルの匂いがした。

伸ばしっ放しの黒髪は、何年も彼女がいない事を物語っているようだ。

典型的な日本のブルーカラーの样相に、ハイソな生活を夢見るあたしには何の興味も湧かなかった。

それなのにあたしが思わず彼を見つめてしまったのは、彼と店員とのやり取りが異様だったからだ。

彼は黙ったまま、カウンターに置いてあるメニューを指差して店員に見せた。

さっきのショートカットの高校生は、キョトンとした顔で首を傾げる。

男性は訴えるような、悲しげな表情で、メニューを指さしたまま店員を見つめた。

「あ、テリヤキバーガー？セットでいいですか？」

ようやく理解してくれた店員に、彼はホッとした顔で首を縦に振った。

だが、次の難関が彼を待っていた。

「お持ち帰りですか？こちらでお召し上がりですか？」

相変わらず黙ったまま、彼は指で床を指した。

ここで食べたいということか。

聞こえている筈なのに絶対に喋ろうとしない彼のジェスチャーが面白くて、あたしは横で二人のやり取りを凝視していた。

あたしの視線に気が付いたのか、突然、その彼がこちらをクルリと振り返った。

その顔を正面から見て、あたしも絶句する。

「ホンダ君・・・だよな？」

目の前に立っている作業着の男性もあたしを見て、目を大きく見開いた。

あたしの記憶に間違いがなければ、彼は本田準一。

中学生の時、あたしが初めて付き合った、初めての男の子だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1427y/>

ロスト・チルドレン

2011年11月2日02時05分発行